

スピリチュアリティを志向した ソーシャルワーク実践とは —モデルとしての「ホットスペース」について—

深谷美枝

1. はじめに

2014年7月の国際ソーシャルワーク連盟のメルボルン会議において、2000年版のソーシャルワーク定義の改正案である「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義（新グローバル定義）」が採択されたことを受け、2020年6月、日本においてもソーシャルワーカー倫理綱領の改定が行われた。新倫理綱領では6番目の原理において、「ソーシャルワーカーは、すべての人々を生物的、心理的、社会的、文化的、スピリチュアルな側面からなる全人的な存在として認識する」と明記され、従来のバイオ・サイコ・ソーシャルの視点に加えスピリチュアルな視点が示された。

今まで日本では一部を除きほとんど注目されてこなかったが、ここで公式にスピリチュアルな視点は表舞台に立ったといえる。それに伴いどのようにその視点を具現化するかが課題となり、2020年度日本ソーシャルワーク教育学校連盟北海道ブロックでは全国に先んじてこのテーマを取り上げ、ソーシャルワーク教育研修会（以下研修会、と表記する）をオンライン開催した。

その中で3つの実践現場から実践と教育についての報告がなされたが、より多くの現在行われている組織的な実践についてのケーススタディの必要性が実感させられた。そのようなモデルを描くことで、可能

なスピリチュアリティを志向した実践（以後便宜的にスピリチュアルケア、とする）の現実が広く知られ、実践のハードルを下げて普及が可能となると考えたからである。

筆者はかつて、三つのキリスト教系福祉施設において調査を行い、その実践の特徴について質的分析を試みた。三つのうち二つはベテランソーシャルワーカーによる個人的実践だったが、一つは組織的、かつ継続的に取り組まれていた。

本論文ではケーススタディの端緒として組織的に取り組んでいる法人「ホッとスペース中原」の実践について、インタビュー、代表者の著作、ホームページ等の資料からスピリチュアルケアの特色を概観してみたい。筆者はこの組織と初期から関わり、20年を優に超える。代表者佐々木氏には公私ともにお世話になり、研究上のフィールドであり続けて来た現場である。

2. ホッとスペース中原の概要

ホッとスペース中原（以下、ホッとスペースとする）はもともと宗教法人中原キリスト教会によって1998年に始められ、教会の開拓伝道と並行して事業を展開してきた。介護保険事業として通所介護、訪問介護、居宅介護支援、支援費事業として知的障害者グループホームと居宅介護を実践している。その他子育て支援、子どもの学習支援、DV被害者支援、触法支援、それらの人々のシェアハウスなどの展開もあり、総合的な地域支援を目指している。小規模だが、心の通った質の高いサービスで地域から絶大な信頼を得ていて、ボランティアも多く、利用者、支援者、ボランティアの一体になったコミュニティを作っている。

以下、理念として謳われていることをホームページに沿って描き、抽出してみよう。

(1) ホットスペースの理念

ホットスペースの法人理念は開拓伝道と並行して始められた経緯からも理解できるように、キリスト教スピリチュアリティにある。

私たちの使命はイエス・キリストが示された〈福音〉を分かち合うことです。

福音とは全ての人が天から無償で与えられた愛と恵み（幸福）を受けて生きている存在であると信じ、コンパッション（共に考え、共に背負い、共に耐える）することです。私たちは全ての人がその人らしく生きることが全うできるように与えられている福音をしっかり受け取れるように支援します。（同法人ミッション）⁽¹⁾

福音を分かち合うことが使命、とされている。このミッションによれば福音とは神から無償、無条件で愛されている存在であること、そしてそれを受けた人間が連帯して共に生きることも含まれている。また福音は「すべての個人がその人らしい人生が生きられるように与えられているもの」であるとされ、人間の自己実現の方向性が謳われている。⁽²⁾ 一見して神学的に見てリベラル、社会派的な福音理解である。

信条においてはより一層共同体が前面に押し出され、事業所の名称「ホットスペース」に込められた思いが語られていく。

～ホットあたたまるスペースを すべての人と共有するために～
ホットスペース中原は 約束します。

ひとりひとりを かけがえのない存在として愛し、
互いに隣人として補いあう 社会を目指します。

ホットスペースの理想とするのは神の愛のもとで、「ホット」温まり、

互いに温め合い、補い合う共同体であり、社会である。

指針においては更に職員の倫理綱領が語られている。

1. すべての人を歓迎する
2. 誠意を持って思いやる
3. 熱心にかかわる
4. 共感的理解への努力をする
5. 全人的にケアをする
6. あるがままを承認する
7. 思いを分かち合う
8. 人と人、人と社会をつなぐ
9. お互いを尊重しあう地域の共同体をつくる
10. すべての人の可能性と未来を信じる

殆どの項目がソーシャルワークの原則等と一致しているが、5の全人的なケアにおいて、後で見るようにスピリチュアルケアの内包が示唆されている。

(2) ホームページに見る「ホッとスペース」のスピリチュアルケアの特色

同法人のホームページにはスピリチュアルケアについて正面から取り組むことが謳われていて、スペースが割かれている。⁽³⁾

①スピリチュアル・ペインの理解

ホッとスペースでは全人的なケアの前提として、全人的な痛み（トータルペイン）を想定している。（図1）そしてその一つとしてスピリチュアル・ペイン（哲学的、宗教的痛み）を理解している。

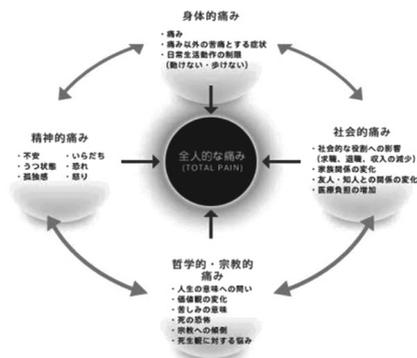


図1 ホットスペース中原ホームページより

人は自分の力では解決できない「生老病死」に出会い、人生の危機に陥ります。そのときに身体の苦しみ、心(精神)の苦しみ、社会的な苦しみに加えて、「どうしてこんな人生になるのか」「どうしてこんな苦しみが与えられるのか」「死んだ方がましだ」などと自分の存在や生きる意味を模索します。その時に感じる苦しみや痛みを「スピリチュアル・ペイン (苦しみ)」といいます。

そしてホットスペースのスピリチュアル・ペインの捉え方には一つの特色がある。それは否定的なもの、解消すべきものではなく、「生涯学習の機会」と捉え、成長の契機として捉えていくことである。

この苦しみから誰もが早く脱して元の生活に戻ることを願います。しかしこの苦しみは無意味なものではありません。人生の危機に出会い、存在の揺れや恐れを抱くことで、自分の生きる意味や存在の価値を問い直す「生涯学習の機会」ともなるのです。

②スピリチュアルケアとは

この「生涯学習の機会」であるところのスピリチュアル・ペインの経

験を生かすことは一人では出来ることではなく、共感してくれる支援者がいて生かされ、その意味を見出すことが出来るとされ、そのような意味を見出す支援を「スピリチュアルケア」と理解している。

しかし、この機会は一人では見出すことはできません。自分のことのように感じて共感的に理解してくれる他者がいて、「大切な存在」への絆に気づき、その存在への「貢献」や「役割」などの生きる意味が分かります。そしてそれが自身の死を超えて残るものであることが分かるときに、希望や新しい生きる意味や価値を見つけ、自身や状況を受け入れ、自分の存在と人生を肯定的に受け入れることができるのです。これを「スピリチュアルケア」といいます。

人は人生の危機に「危険とチャンス(機会)」の分水嶺に立ちます。私たちは、その時に人間としての学習の機会となるように「寄り添ってくれる者」(ケアラー)の存在、すなわち、重荷を共に背負い、共に耐え、共に考え、共に歩む存在として歩んでいく者となるよう、ケアに取り組んでいきたいと考えています。

③全ライフステージ、全領域に及ぶ支援

ホッとスペースのスピリチュアルケアの特色の一つは福祉や医療等の関わるすべてのライフステージ、領域にその視野が広がられていることである。

ホッとスペース中原はターミナル期(看取り期)に限らず、老いや認知症による生きにくさ、思いもよらない障がいや疾患の受傷による痛み、それらによって生じる人間関係や役割の喪失、貧困や社会的排除・差別、失業や引きこもりによる孤独など、福祉や介護、医療や看護、教育や社会問題に伴うスピリチュアルな苦しみに正面から向き合い、(中略)

高齢者介護から出発した同法人であれば、狭義のターミナルケアから踏み出して、高齢期全体のケアが中心となることは想定範囲である。しかし、それにとどまらず、障害、貧困、社会的排除や差別、労働、教育などにも視野が広がられている。これは同法人の事業展開ともかかわっているであろう。

④相互の成長という理念

同法人の理念の一つには専門職が利用者から学び、相互に成長するというものがある。ケアの提供者が一方的な支援者ではなく、生き方、あり方を利用者から学んで、相互に豊かになるという共同体の理想が示されている。

一人ひとりに寄り添うスピリチュアルケアを通じて、その人の生活・人生の質の向上を支援し、同時に私たちも人としての生き方、在り方を学ぶことで人間的成長を目指し、より良いケアを行っていきたいと考えています。

(3) ホームページ概略から見たまとめと考察

ここで若干の短い考察を試みると、ホッとスペースの支援理念には

- ①キリスト教スピリチュアリティによるケアであり、
- ②トータルペイン、とりわけスピリチュアル・ペインに注目したケアを実践すること。しかもスピリチュアル・ペインを「生涯学習の機会」として肯定的に捉えること。
- ③福祉や医療、教育がカバーするような広い年齢層、課題に対応するケアであること。
- ④ケア提供者中心支援ではなく利用者との相互の学びあい、支えあいが見て取れる。

①欧米のソーシャルワーク実践では、スピリチュアリティ志向のソーシャルワーク実践は特定の宗教スピリチュアリティをベースとした実践であることは普通であり、場合によっては祈りが用いられたりする。日本ではしかし、あまり多くはない。キリスト教精神に基づく支援などと謳われている施設は多いが、多くは形骸化している。

②欧米のソーシャルワーク実践ではスピリチュアリティに注目してその意味を探った支援が普通であり、日本の緩和ケアの領域で伝統的に実践されて来たスピリチュアル・ペインに対する注目はなされないが、ホッとスペースはスピリチュアル・ペインに対する注目がある。しかも、通常スピリチュアル・ペインは医学モデルに則って「取り除かれるもの」として考えられるが、肯定的に「生涯学習の機会」と捉えられ、そこからソーシャルワークの用語でいえば「エンパワーメント」され、「レジリエンス」がなされるポイントとされている。

日本で採用されて来た伝統的な方法を「医学モデル」として退けることなく、巧みにソーシャルワークの持つ生活モデルやエンパワーメントの方向性をつないでいるといえる。

3. ホッとスペースのスピリチュアリティについて —神学的観点から—

ホッとスペースの基盤をなしているのは先述した通り、キリスト教スピリチュアリティである。それは福音派の中原キリスト教会の開拓伝道と共に進んできて、NPO法人になるまでは宗教法人の運営であったことから理解される。

しかし、福音派であり、敬虔主義の流れをもつ所属教派とリベラル、社会派的な色彩を持つホッとスペースとの理念には同じキリスト教スピリチュアリティとは言ってもかなりの乖離が感じられる。本章と次章で

はそのスピリチュアリティの成り立ちについて少し考えてみたい。

①福音派の「ケアチャーチ概念」

福音派で敬虔主義の伝統を持つ教団に属する中原キリスト教会で、何ゆえに福祉実践なのか。そして一見すれば神学的にリベラル、社会派的な福音理解を理念として謳っているのか。これについての一つの答えは、2012年頃から佐々木氏の関係する福音派の東京基督教大学を中心に打ち出され、研究会等も開催されている「ケアチャーチ」というコンセプトにある。それは端的に言えば教会が積極的に福祉の働きを担っていこうという動きである。

教会が福祉の働きをしていくことは社会福祉の本流であり、歴史的に見れば何ら新しいことではない。戦前の有名な「社会事業家」と呼ばれる実践者たちの多く、例えば貧困問題では賀川豊彦、児童分野では石井十次、留岡幸助、知的障害分野では石井亮一、女性福祉その他の分野では山室軍平等がキリスト教信仰に基づいて実践を展開してきたし、また戦後においてもキリスト教的理念を掲げた社会福祉法人が各分野で長らく中心的に実践を担って来た。しかし、大勢においては戦後の公共の福祉政策⁽⁴⁾、憲法に定める公私分離などにより、日本においては教会と福祉実践の関係性は形骸化し、薄弱となった。⁽⁵⁾

ケアチャーチ概念はその関係性を新たに構築し、宣教のわざとして主体的に地域における福祉を教会が担い、地域と深くかかわりを創り出していこうという運動である。⁽⁶⁾「地域密着型教会福祉実践」とも呼ばれる。⁽⁷⁾

代表者佐々木氏はこのケアチャーチ概念の中心的な唱道者の一人であり、先駆的な実践として紹介もされている。

②ケアチャーチの先駆的实践としてのホットスペース

ケアチャーチの類型、つまり教会と福祉実践のかかわりや、地域とのかかわりの類型についてここでは少し触れておきたい。

稲垣はケアチャーチ実践を「1. 派遣型, 2. 事業型, 3. 伝道型」と三類型で説明している。「派遣型」とは、福祉の働き人を宣教者として派遣し、教会そのものは福祉事業を行わないタイプであり、「事業型」とは、教会そのものが宗教法人格や場所、建物を使って福祉サービスを実際に展開するタイプ、「伝道型」は、福祉の働きそのものが信仰に基づいた霊的な活動であるタイプである。この分類に則れば、ホットスペースは「事業型」に該当する。

事業型実践の主体は、宗教法人のほか教会が教会運営と車の両輪のように立ちあげたNPO、教会員の有志やスタッフが教会との密接な関わりの中で設立した会社組織、複数の地域の教会が共同で行う事業など多岐にわたり、運営形態も介護保険制度等の公的制度を活用したのから、制度を頼らずに自前で福祉ボランティアを組織して行うもの、市町村社会福祉協議会との連携で会堂を提供して行う「ふれあいサロン」など多様である。⁽⁸⁾

事業型実践の中にも主として教会のメンバー対象だったり、教会メンバー中心の職員で実践をしているところから、広く地域社会を対象とした実践や他の機関や専門職を巻き込んだ実践を展開しているところまで様々なタイプが存在する。

井上(2015)はコミュニティと教会の関わりを、クリスチャンスタッフか市民と協働タイプかを縦軸に、その教会が社会(公共)にどの程度開かれるか(ケアサービスの対象が教会員か、地域住民か)を横軸にした四象限の見取り図として描いている。

教会が教会メンバーの相互扶助として行うもの、外の専門職を活用するが教会メンバーのみを対象とするものをクローズト・コミュニティ・

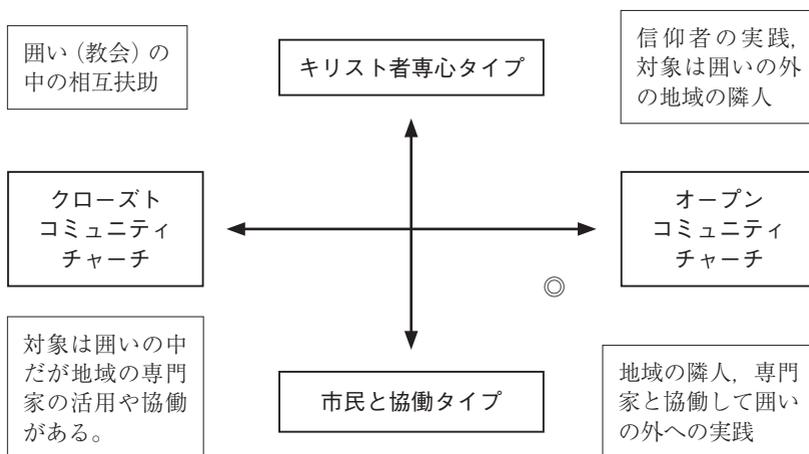


図2 教会実践とコミュニティの関係 (◎はホットスペースの位置)⁽⁹⁾

チャーチとすれば、地域の一般の人たちを対象として教会メンバーが行うもの、さらに地域の専門家や隣人と協働して地域社会を対象として行うものをオープン・コミュニティ・チャーチとしている。ホットスペースは◎印で書き加えているが、地域の一般の人たちを対象に、スタッフも教会外の専門職と協働しているため、もっとも開かれた形の実践ということが出来る。

井上の論考では土浦めぐみ教会という教会⁽¹⁰⁾の喜楽希楽サービスという介護保険事業を事例研究しているが、ホットスペースがモデルであることが明記されている。⁽¹¹⁾しかし、喜楽希楽サービスは教会スタッフのみによる地域を対象としたサービスであり、地域の隣人、専門家と協働した実践までは到達できていない。また高齢領域以外の広範囲な福祉領域に実践を広げている点でも先駆的な実践ということが出来る。

③ホットスペースの神学について—公共圏へ教会が出ていくための、帰納的な神学形成か？

先述したように、一見リベラル、社会派的な福音理解をホットスペースは掲げていて、それは福音派に伝統的な「罪—死—救い」路線ではない立場に立っているように見られる。これは一体どういうことなのか。

前掲鈴木(2015)は、地域社会には、教会が自らの親密圏から抜け出していかなければ、届き得ない「痛み」「苦悩」があり、教会が公共の福祉を担うことによって、異なる信仰、哲学、文化と共存し、社会制度においてもメゾレベルからマクロレベルへと交錯する「公共圏」にチャンネルが開かれる必要性を示唆する。その時に、地域社会で痛み苦悩する人々との共生が始まり、社会的責任の一端を担うことができるとする。

教会が公的な介護サービスのチャンネルを通して、公共圏に開かれていくということは、教職者中心の教会観や主日と平日での働きを二元論的に考えやすかった信徒の世界観からの脱却をも意味する。換言すれば、教職者も信徒もその双方が手を携えて、この世界に仕えていく教会(ディアコニアを起点とする教会)へと成熟していくということである。

そこで必要になってくるのが、実践で体験されたことを実践神学として展開する帰納的な神学形成である。ホットスペースはそのような作業を先駆的に進めているようにも見受けられ、その暫定的な到達点が理念に述べられたようなりベラルな福音理解や社会派的なスタンスなのではないか、という推論が成り立つ。

その件について筆者はインタビューで質問してみた。

F.十字架の理解の中で、例えばどうしても福音派だと、自分の罪のために私にかわってというのが強いのだろうと思うのですね。

佐々木 私自身の十字架のとらえ方というのは、やっぱり神様がこの私のために一番大事なイエスキリストさえも惜しまずに与えてくださるほどの愛

のお方というのが大きいのです。そこから、では十字架の許しというのはどこから出てくるかと言うと、そこを元にして出てくるのですよ。そして私の中にある罪をあがなうというところにつながっていくのですよね。そこですね。罪、罪と言われるどっちかと言えば19世紀から20世紀にかけて、こうやっぱり強調されてきたところかなと。そこから言うとうどうなのかなと思いつながら、その(愛のシンボルとしての)十字架をやっぱり。

刑罰代償論的、アンセルムス的な十字架理解よりも、道徳感化論的アペラルドゥスの十字架理解に近いように思われる。また社会派的スタンスについても尋ねてみた。

この事業をするときには、これはやるべきだという思いがあったのだけれど、それは信仰的なのかということは、もう後ろから鉄砲が飛んでくるわけですよ。教会の中から。中原キリスト教会の中じゃなくて、同じ教団の中から鉄砲が飛んでくるわけですよ。いろんな教会の人が「それは教会の働きではないのじゃないか」と。

これは本当に感覚なのですけれども、やっぱりこういう実践をしていくと、いわゆる非常に福音派的なところから広がっていかざるを得ないというか、帰納的に神学が現場からたたき上げられていかざるを得ないということがかなりあると。

結局は組織神学と実践神学は離れているじゃないですか。そこに神学的な問題があるのじゃないですか。やっぱり実践って、その場全体、生活全体から、この世界全体から考えないと神は届かない。

福音派の伝統的なスタンスは伝道であり、教会形成である。氏のスタンスはそれを乗り越えてディアコニアの教会として社会に仕えていくことである。現在はケアチャーチ概念としてある程度承認を得ているが、

当初はかなりの批判を浴びたことがインタビューから推察される。しかし氏の基本的な立ち位置は現場であり、実践である。現場から帰納的に神学を創り出していくことが明言されている。その結果たどり着いたのが、推察通り、一見社会派的なスタンスであるようだ。

4. 法人代表佐々木氏のライフヒストリーについて⁽¹²⁾

法人のスピリチュアルケア実践は法人の代表である佐々木氏のライフヒストリーと分かちがたく結びついている。換言すれば佐々木氏のスピリチュアリティに根差している。それはホームページをはじめ、数冊の著書⁽¹³⁾の中でも繰り返し語られるところである。

佐々木氏のライフヒストリーについてスピリチュアルケア実践の源泉という側面から少し整理しておきたいと思う。

(1) 出生について

佐々木氏は存在すべきでなかった私、という言葉で自己を語る。⁽¹⁴⁾ 家庭が複雑で、もし一步間違えばこの世に生まれてこなかった事情があったからである。事情とは両親にかかわることであり、列車事故から精神病院に隔離入院させられた高次脳機能障害の父とその父親にボランティアとしてかかわり、電気ショックによる当時の治療を嫌がった父親の無断退院をほう助し、逃避行を続けた19歳の母親のもとに生まれたことであった。父親にはすでに家庭があったことから愛人の子ということになる。

逃げ出したはいいが、病を抱えた父親は仕事が出来ず、28歳年下の母親が生計を担うことになった。他人の家の軒先を借りるなどして同じ場所に三か月と定住することが出来ず、飢えと寒さに悩まされ続けるホームレス生活を約十年間送った。佐々木氏はそのような「社会通念上

私という存在が許されるはずもない」状況の中で生を受けることとなった。両親は悩みぬいた末に産む決心をしたのである。

この出生の事情は佐々木氏に光と影をもたらす。光の部分でいえば死に場所を求めて彷徨う両親に無償で一間を三年間も貸してくれたような他者の善意や愛に出会う経験であった。氏はこのエピソードを「福祉の原点」と呼んでいる。

私は見ず知らずの誰かからそれ（愛や慈悲や仁というもの）を受けたゆえに、自分も見ず知らずの誰かにそれを実践していく大切さを強く感じている。それが私の福祉の原点であり、その基盤でもある。（どん底から見える希望の光, p.13)

影の部分ではこのことは隠しておきたいこと、として氏にとって負い目となってきた。しかしやがて、この負い目も氏の中では支援において利用者と出会う中で、弱さによる連帯を生み出し、つながる中で互いに癒しあう「よすが」となっていくのである。

自分の生い立ちにやっぱりかかるわけですよ。実は自分の生い立ちにかかわってきて、自分が今まで隠してきたのですよ。例えば自分は妾の子供なのです。村八分に遭ってきた。というところでこの辺が偏見に引っかかるわけですよ。妾の子供として扱われ、そして父親と母親に精神疾患があると言われて精神病院に入り、そして逃げ回りというところがいろいろとあるわけですよ。そういうところでは実はそのようなのを隠して生きているわけですよ。

社会の中でそれは余りいいものではないから隠しているのですけれども、（ケアの中では）そういうところがあぶり出されるのですよ。それが弱さとしてお互いにつながりあわされて、実は僕自身も癒されていくし、何がそのときに必要だったのかということがわかるわけです。その心が湧いてくるわけ

です。

要するに自分の生活史の中で、ネガティブな要素や、傷というのがありますね。その傷というものが利用者と出会うことによって、悪く回ればいわゆる逆転移になっていくのだけれども、その人が癒されることは、自分の同じ傷が癒されるというつながり方をしていく連鎖にもなるのです。⁽¹⁵⁾

(2) 荒れた青年時代

ホームレス状態であった氏の両親は、村から2km離れた山の中にゴミ捨て場から集めた資材で掘っ立て小屋を建てて生活を始めた。水道も電気もなく、もちろんテレビや冷蔵庫もなく、風呂もなく、夜はろうそくの明かりで暮らす生活であった。そのような環境で氏は中学まで暮らすこととなる。

佐々木氏の父はクリスチャンであり、その母、つまり祖母の代からクリスチャンであった。しかし祖父が酒飲みで暴力をふるう家庭であった。父親もまたクリスチャンではあっても、子どもたちを暴力で縛る父であった。子どもたちを毎朝毎夕、とにかく2kmとか3kmを強いて走らせた。

妹はオリンピックで金メダルを取るようなアスリートとして成長したが、佐々木氏は挫折をして、中学のときにそういう家庭が嫌になって不良になった。家に帰らず、友達の家やゲームセンターに入り浸り、夢も希望もない中で、気が付けばアイドル歌手の親衛隊長として何百人もの不良グループを束ねるリーダーになっていたという。

その頃の心象風景を氏は以下のように語る。

学生時代の私は成績が悪く、中学生の頃から「誰もオレを心底理解してくれない。大人は表面的な事や人を序列化し評価する」と感じてそのことにいたたまれない苛立ちを抱くようになった。そしていわゆる不良になっていった

のだ。次第に生活は荒れ、様々な事件も起こした。そんなある日、私はアイドル歌手のコンサートに行き、そこで今までの生活では得られなかった興奮、開放感を体験した。その瞬間はのしかかる現実やしがらみから自由になり、嫌な現実を忘れられた。ここに初めて自分の居場所を見つけたような気がしたのだ。(どん底から見える希望の光, p.18.)

しかしながら見出した居場所は暴力や争いの絶えない「黒い世界」、やくざや暴力団と変わりのない組織であった。その世界で力をつけ、君臨するようになって心も渴きは潤すことが出来なかった。職場も転々とした。

しかし、それでも私の心には生きているという実感も生きる喜びもなかった。心は荒れずさんで枯渇して死にそうだったのだ。ひとたび親衛隊以外の私生活に戻れば、学校は卒業したものの、これといって生きる意味も目的もなく、その場が楽しく過ごせさえすればそれでいいと言わんばかりの有様。小さな町工場で汗と油まみれになって働く職を見つけても、結局すぐに辞めてしまう。そんなことの連続だった。親衛隊の熱狂から離れて、我に返り、現実の中で自分を見る時、どうしようもなく惨めになり、消えてしまいたい気持ちになったものだった。(どん底から見える希望の光, p.20.)

佐々木氏を襲っていた空虚感の正体は何だろうか。それは社会からの疎外感、無価値な存在として扱われている思いであった。

どうせオレなんかこの社会では邪魔ものなんだ。誰も社会の虫けらのような無用なオレの声なんて聞いてくれない。ましてや思いなんて受け止めてくれるわけがない。何のために生きているんだろうか。オレなんかヤッパリ生まれてこなければよかったんだ。

いくら、自分の存在の意味を思い巡らしても、町の喧騒と人混みの中では私の思いなどどこにも届かなかった。その度に、ふがない自分自身から逃げ出そうとするかのように、暗闇に光を求めるように、私は爆音を轟かせながら目的もなく車を飛ばし走り続けていた。自分の現実からなんとか逃げ出したい。その一心だったと思う。(どん底から見える希望の光, p.20.)

(3) 出会い、コペルニクスの転回

そのような佐々木氏が立ち直っていったのは、どのようなきっかけだったのだろうか。それはキリストとの出会いと教会での人との出会いであった。

ある時、佐々木氏は暴力事件を起こし、学校から謹慎を食らってしまった。それまではすべてのことが暴力で解決できると思っていたが、その力の限界を知り唯一の拠り所を失ったのである。「人間は何をもって生きることが大事なのか」を問われた。力に代わるものを探したいと思っていた時、クリスチャンである父親が自分は教会に行っていないにもかかわらず、教会でも行ってみたらいいと声を掛けてきたという。そこで父親の知り合いの教会を訪ねることになった。

教会には保育園が併設されていて、訪ねる度に子供たちの遊び相手をするようになった。子供たちは大人とは違って、無邪気にまわりつき受け入れてくれた。その経験が佐々木氏に「必要とされている自分」という実感を初めて体験させてくれたのである。

私自身が変わったのは、人との触れ合いだったのです。牧師との触れ合い、そして教会に来ている子供さんたちとの触れ合いだった。当時私はヤンキーだったのですが、ヤンキーの私を受け入れてくれるのは社会じゃなくて、牧師と子供たちでした。そこで「受け入れられる」とか「必要とされる」という人間の生きる喜びに出会ったのです。(インタビューより)

佐々木氏はこの人たちに自分の尊厳を認められ幸せを願う存在によって自らの尊厳を回復する機会を得た。無論、それだけではない。佐々木氏はより大きなキリストとの出会いを体験することになる。それは有名な聖書の「迷い出た羊」のたとえ話であった。100匹の羊を飼っている羊飼いがいて、その中の1匹が迷い出たらどうするか。羊飼いは迷い出た1匹を断罪したり批判したり、責任をとらせたり、見捨てたりせず、ただ99匹を残してひたすら迷い出た1匹を探し出し、命がけで助ける。この物語を読んだとき、神の想い、まなざしに打たれたのである。

私はハッと気づいたこの羊こそ私自身ではないか神様という方は社会の枠からはみ出し彷徨っていた私を探し出しまるごと受け止めこんな無様な状態であるにもかかわらず私の存在を喜んでくれていると感じたのだ。神様が探し出されるに値しない、自らハミ出した私を、捜し出すことを厭わず見つけ出して歓迎してくれている。この大きな愛があれば、私はどんな時でも生きていけると思った。私は生まれて初めてこの世に生まれてきてよかったと感じた。(どん底から見える希望の光, p.21)

神が自分の最も愛する一人子である主イエスを、十字架に身代わりに掛けるほどに、私たちを尊い存在として愛しぬいてくださっている。『こんな私だから尊い』それは氏にとって「コペルニクス的な喜び」であった。

特徴的であるのは、佐々木氏にとって、他人から受け入れられることと神から受け入れられることがバラバラではなく、見事につながりあっているということである。人を介して神との出会いがある。信仰が人との出会いに裏打ちされている。それが佐々木氏のスピリチュアリティの特色である。

人との出会いを通して、社会から見捨てられていた自分が神に見出さ

れたように、つながりあうことによって見捨てられたと感じていた人も神に出会い、新しい人生を始めて欲しいし、そうすることが出来る。そのようにして信仰と福祉がひとつながりにつながっているといえるだろう。

そこから人の生きる大事なことというのは、イエス様と生きることなのだけれど、それは知識で教えられることではなくて、日常生活の中での人との出会いがあり、価値の変容がある中で深まり、発展がなされるということそのときに学びました。それが福祉へと繋がって行って、社会から見棄てられたと感じている人が新しい生き方が出来る、新しい人生があるからそれを体験して欲しい、ということで福祉と教会と信仰が繋がったのです。(インタビューより)

氏はこのようにして18歳で洗礼を受けることとなった。

(4) 介護の進路へ

佐々木氏がどうして介護の専門学校にその後進学することになったのかは、著書にもインタビューにも語られてはいない。また、その後専門学校に入学することになるのであるが、献身の直接の動機についても語られていない。人を救いたいという思い、として僅かに触れられているところから、推察するしかない。介護の仕事につくことになったのは、20歳の時にある人と出会ったことがきっかけだと語られている。⁽¹⁶⁾

それは学校に隣接する障害者施設に入所していた利用者で、自分と同年の重度心身障害を持つ若者であった。その佐藤さん(仮名)は筋肉の難病で「うー」と奇声を上げ、口からよだれを流して、部屋の床にはいつくばっていた。氏は世の中に自分よりも不幸な人間はいないと思いきこんでいたので、大きなショックを受けた。自分の生い立ちと現状より

も悲惨な現実があると思い知らされたからである。

佐藤さんが難病を発症したのは中学生の頃であり、家族は彼の病気が原因で経済的にも精神的にも追い詰められて一家離散し、佐藤さんには施設に入るという選択肢しかなかった。なんの落ち度があるわけでもないのに難病を背負い、体の自由を奪われ言葉を発することもできずに生きている佐藤さんに、少しでも幸せになって欲しいと思った氏は頻繁に、彼を訪問することになった。

何をするかといえば、一緒に好きな音楽を聴いたり、テレビのビデオを見てたわいもない話をしただけである。休日は氏の車に乗って外出をし、「女の子をナンパしてみたい」という1人の青年として当たり前の心の渴望に触れたこともあったそうだ。卒業間近に控えた頃何気なく進路に迷っていた氏が彼に悩みを打ち明けたところ、そこで文字盤を使って佐藤さんは一生の進路を決める「使命」となる言葉を氏に贈ってくれた。それは「僕のような人たちの介護をして一緒に生きて欲しい」「いつか僕たちが地域の中で当たり前で生きることができるようにしてほしい。大丈夫、君ならできる。」という言葉であった。

なかなかそのミッションは果たすことができないと負い目も感じながらその後生きることになったが、彼の言葉を胸に、障害や疾患、貧困、老い、能力の有無に関係なく誰もが地域の中で当たり前で生きることができる方法を模索し、「大丈夫君ならできる」という言葉に励まされながらそのミッションに挑戦し続けることになった。

(5) その後

特別養護老人ホーム、プライベート介護に携わり、1998年33歳の時にホッとスペースを開設することになる。その間の利用者との間のエピソードも「人は“命”だけでは生きられない」に盛り込まれているが、資産何千億円の経済的に裕福な方や高名な心理学者、私学の創業者など

が、どんなにお金や学識があっても、老いや病、死を前にしてスピリチュアル・ペインを抱え、その緩和を求めたそうである。この辺りのエピソードはほんとスペースのエピソードと区別して著書に記されていないため、詳細はつかむことができない。

中原教会とほんとスペースは同時に開拓伝道と事業が進められたとされているが、当初少し時期的に先行して一般の教会として中原教会の伝道がなされていたようである。それがケアチャーチとして特徴的な伝道牧会にシフトするきっかけとなった一つのエピソードが著書に記されている。⁽¹⁷⁾

15人ばかりの人数で古びたビルの1室を借りて礼拝をしていた時、クリスマスにトルストイの書いた靴屋のマルチンの劇をすることになったという。

靴屋のマルチンは長く連れ添った妻や1人息子を喪い、失意の中にいた時絶望の中でキリストの声を聞く。「マルチン、明日あなたのところに行くから待っていてくれ」

次の日、マルチンはいつキリストが現われるかと期待して、窓ばかり見つめていたが現れない。その代わり、あまりに困っている人貧しい人が次々に現われる。夜になってもキリストは現れず、落胆するが、昨夜と同じようにキリストの声が聞えた。「今日あなたを訪ねたあの人たちは、皆私だったのだ。私がお前のところに行ったのがわかったか。貧しい人、悲しんでいる人、苦しんでいる人、そのような人たちの中に私はいる」

子供達と練習を重ねて、本番を迎えた。子供達はうまく演じ、拍手喝采を受けた。劇を終えて片付けをしていると、教会のドアが開き、そこには息を切らした小さな女の子と、父親らしき人が立っていた。その子供は、夕方配った子ども劇のチラシを持っていた。父親が事情を話した。昨年妻が亡くなり、自分たちは父子家庭になったこと。初めての2人きりの寂しいクリス

マスになると思っていたが、子供が教会に行こうと誘ってくれたこと。しかし自分はどうしても抜けられない仕事が入り、遅くなってしまったこと。わがままだとわかっているが、この子のためにもう一度劇をやってくれないかと。

子供達はやろうと言ったが、大人たちは予定が詰まっているので無理だと言った。大人の意見が通り、それを父親に伝えると、女の子は悲しそうな目で私を見つめ、父親は無言でその子の手を引き、去って言った。教会の子供たちに残念だけれどもできないと大人の結論を説明したら、子供達は少しの間しんと静まり返った。その直後、キリスト役をした小学2年生の男の子が大きな声で、大人に向けて劇のセリフ叫んだ。「貧しい人、悲しんでいる人、苦しんでいる人、困っている人、そのような人たちの中に私はいます」彼は涙声でこう続けた。「本当のキリストがきたのに大人は返したんだ。教会がキリストを返していいのか」

大人は絶句した。

氏は我に返り、急いで教会の外に飛び出し、キリストを探した。暗闇に親子は見つからなかった。キリストの誕生を祝う日に主役のキリストを追い出してしまった偽善者の自らに気づき氏は人目をばからず泣いた。

その後何年かして、教会で福祉の働きを始めたという。

教会形成を目的とした通常の教会運営の観点からなら、牧師としての当初の氏の判断は必ずしも間違いとは言えない。しかし、人との出会いに神との働きかけを感じ取る氏のスピリチュアリティからすれば、それは神への裏切りであり、自らの信仰に対する背反行為であった。そのような出来事から自らのスピリチュアリティを強く自覚させられたことが、ケアチャーチとして福祉の働きをしていく一つの原点となっていく

のである。

(6) ライフヒストリーに見る佐々木氏のスピリチュアリティの特徴

以上、佐々木氏のライフヒストリーをスピリチュアルケアの原点となるスピリチュアリティの観点から概観してきたが、特徴として見られるのは

- ①どん底の経験があること
- ②神との出会いによってコペルニクスの転換を経験したこと、それが人との出会いに裏打ちされていること
- ③人との出会いに神を感じ、柔軟に自らが変化し続けること、である。

①出生から青年期前期までのエピソードは凄絶であり、いわゆるホームレス経験、被差別と排除の経験、貧困の経験である。そこから社会的な疎外感を感じ、反社会的な方向へと歩みを進めていったことが見て取れる。

この経験はそれ自体重たいものであるが、氏にとっては同様な状態に置かれた人たちに対する共感や連帯に生きるリソースとなっている。

②キリスト教の回心は説教で心打たれたとか、一人聖書を読んだとか、祈って気づかされたとか、つまり神との個人的、実存的な関係のレベルで語られることが多い。氏の場合も聖書の迷い出た羊の話について語られた説教におけるキリストとの出会いが回心の直接のきっかけであろう。しかし、その出会いには教会の人たち、特に子供たちに受け入れられたという裏打ちが大きく作用している。

つまり氏のスピリチュアリティの核心部分には神との出会いには人との出会いが分かちがたく結びついていて、そこから人生の転換が可能になるという信念がある。自らが体験したように他者と共感連帯する（あるいはされる）中で、その他者の人生が劇的に転換し、成長するという

こと、つまり絶望状態での出会いこそが、成長の起点となるという思想がある。これは「スピリチュアル・ペインは生涯学習の機会」というホッとスペースのスピリチュアルケアの考え方そのものであり、佐々木氏のライフヒストリーとホッとスペースのスピリチュアルケアの最大の接点である。

③氏の福祉への召命自体が佐藤さんとの出会いから学ばされ与えられたこと、ケアチャーチへの転換がクリスマスの親子との出会いであったように、他者との出会いによって大切なメッセージが神から与えられ、柔軟に自らが変化していくスタンスがある。これはホッとスペースの四つ目の支援理念の特徴である「利用者との相互の学びあい、支えあいが強調される」ことへとつながってくる。そして、福祉は「他者との関係を通して」自分を見出すことへとつながっている。

5. まとめと今後の課題

以上ホームページにある理念やミッションから、そして神学的立場の側面、佐々木氏のライフヒストリーからホッとスペースのスピリチュアリティ、それによるスピリチュアルケアの特色を概観してきた。

改めてまとめを仮説として提示すれば

(1) ホッとスペースのキリスト教スピリチュアリティは福音派のケアチャーチ運動の中に置くことが出来るが、そこでは地域の隣人である利用者とのかかわりから、公共圏にチャンネルが開かれて現場から新しい実践神学が立ち上げられつつあり、従来の福音派神学とは異なったものに進化しつつある。

(2) 日本で緩和ケアの領域で採用されて来た伝統的なスピリチュアルケアを「医学モデル」として退けることなく、福祉や医療等の関わるすべてのライフステージ、領域にその視野を広げる中で、巧みにソーシャ

ルワークの持つ生活モデルやエンパワーメント、レジリエンスの方向性とつないでいて、スピリチュアル・ペインを「生涯学習の機会」として肯定的にとらえている点に独自性がある。

(3) 氏のライフヒストリーから紡ぎだされるスピリチュアリティの核心部分には、神との出会いには人との出会いが分かちがたく結びついていて、そこから人生の転換が可能になるという信念がある。自らが体験したように他者と共感連帯する（あるいはされる）中で、他者の人生が劇的に転換し、成長するということが、つまり絶望状態での出会いこそが、成長の起点となるという思想がある。これは「スピリチュアル・ペインは生涯学習の機会」というホットスペースのスピリチュアルケアの考え方のものとなっている。

以上のように整理してみたとき、次の課題は様々な利用者の人生へのスピリチュアルケア実践において、どのようにそれが実践されているか、実体化されているのかという点である。そのような点については本論では全く触れることが出来なかった。

次の論文ではケーススタディの第二弾として利用者の事例を公開されている著書やインタビュー等からピックアップして分析し、スピリチュアルケアの特色を描き出してみたい。

注

- (1) ホットスペース中原ホームページ <http://hotspacenakahara.org/about/misson/> 2021.9.19閲覧。
- (2) 同法人の母体となった中原キリスト教会は福音派の「日本聖契キリスト教団」に属している。同教団は北欧をルーツとする敬虔主義の流れを持ち、ルーテル派の世俗化に抗して十字架信仰と再生に立つところからのネーミングである。<https://nssk.webnode.jp/%e6%b2%bf%e9%9d%a9/> 2021.10.28閲覧。
- (3) http://hotspacenakahara.org/effort/spritual_care/ 2021.10.28閲覧。

- (4) 宗教的なものとの分離に決定的な影響を与えたものは、岡村重夫の社会福祉概念の定義における宗教的なものとの分離の視座であることが指摘される。岡村の戦後の福祉国家に基づく「法律による社会福祉」という概念は日本の社会福祉において決定的な影響を与えたのであるが、宗教的意識や価値を近代科学の視点によって分離することで社会福祉を限定することに成功したとされる。木原活信(2003)『対人援助の福祉エートス』, ミネルヴァ書房。
- (5) 比較的最近の調査では坂本(2011)が教会とキリスト教社会福祉の関係の希薄さを指摘している。坂本正路(2011)「教会とキリスト教社会事業の協働を問う」, キリストと世界:東京基督教大学紀要21巻, pp.150-193。
- (6) 井上貴詞(2012)「地域教会の福祉実践へのチャレンジと課題—教会における11年間の福祉実践の総括と各地に広がる教会福祉実践の考察—」, キリストと世界:東京基督教大学紀要第25号, pp.190-215。
- (7) 井上(2012)によれば、社会福祉の基礎構造改革の先鞭としての介護保険制度が2000年に施行されて以来、独自の取り組みとしての地域社会への福祉実践を行う教会が増えてきたといい、知る限りでも、全国十数カ所以上の地域の教会が、地域の文脈とニーズを見極めて、具体的な福祉実践を持って地域社会に仕えているという。東京基督教大学では、地域教会がそのように福祉のミニストリーを行うことを応援する「ケアチャーチ・プロジェクト推進委員会」を立ち上げ、福祉を行う教会のネットワークづくりや情報交換、神学的な意義付け、人材養成の課題を共に考える機会を設けている。現在は高齢、子ども食堂、フリースペース等に広がりがみられる。
- (8) 井上(2012)前掲論文, p.206。
- (9) 井上(2012)前掲論文, p.209図1を参考。
- (10) 土浦めぐみ教会は福音派の日本同盟キリスト教団に属する教会である。
- (11) 井上前掲, p.201。
- (12) この部分は思想史的な深みに進むことが可能な部分であるが、本論はスピリチュアルケアのモデルを描き出すことに目的があるため、概略にとどめる。
- (13) 本論は主として以下の二冊を参考に行っている。
佐々木炎(2012)『人は“命”だけでは生きられない』, フォレストブックス。

(2019)『どん底から見える希望の光』, キリスト出版社。

- (14) 佐々木 (2019) 前掲書, p.160。
- (15) インタビューより。
- (16) 佐々木 (2019) 前掲書, pp.24-27。
(2012) 前掲書, p.8-12。
- (17) 佐々木 (2019) 前掲書, p.6-11。